

鹿持雅澄の青年時代

— 二つの新資料の考察 —

小 関 清 明

(高知大学文理学部・国語学国文学研究室)

Young Days of KAMOTI MASAZUMI

— A Research for two new materials —

Kiyoaki OZEKI

(Seminar of Japanese Literature Liberal Arts Faculty, Kôchi University)

I. 青年時代の雅澄の日記

鹿持雅澄の青年時代の日記があることを知り、ざつと一覽したのは昭和二十五年のことであつたが、このたび現在の所蔵者である刈谷正勝氏の御好意によつて借覽することが出来たので、これによつて知り得たところを記しておきたいと思う。

日記は二冊で、いずれも本文と同じ料紙を表紙にして紙差で仮綴にしてある。その一冊には表紙に「文化九壬申」とあり、本文は二十四枚で、正月元日から十二月二十四日までの毎日の記事がある。一月十五日の記事の中に「深澄案云々」とある。深澄は雅澄の前名であるから、これによつて日記が雅澄のものであることが明らかである。⁽¹⁾

あとの一冊には表紙に「自文化六年己巳」とあり、内容は

- (1) はじめの十五枚に十二月二十五日から七月四日までの毎日の記事があり、
- (2) 第十六枚は八月十三日から十九日までの記事であり、
- (3) 第十七枚第十八枚は七月二十一日の記事である。

このうち (1) は、表紙に「自文化六年己巳」とあるにもかかわらず、実は文化九年十二月二十五日から翌年七月までの日記であると認められる。その理由を挙げると、

- a. 日附が文化九壬申の日記にそのまま接続していること、
- b. 文化九壬申の日記に、六月七日に「始教授館詣」とあつて、この日記に「教授館出」という記事がひきつづいて出ており、又前者で初会のあつた日本紀会の記事が後者に見えていること、
- c. この日記の正月二十一日に「去十二月十六日太守様江戸＝於而御任官之由今月九日之御飛脚＝御国元へ聞ル由也」とあり、これは文化九年十二月十六日に山内豊資が侍従に任ぜられた⁽²⁾のをさすと思われること。

などである。次に (3) の部分は (1) からそのまま続いているけれども、多分同じ年のものである。 (2) は誤つてこの位置に綴じられたものと見えるが、その筆蹟が (1) (3) とかなり違うので、同じ文化十年のものではないらしい。表紙に「自文化六年己巳」とある（この文字は後年の雅澄の筆である）のが單なる思い違いでないとするれば、(2) は文化六年の日記の断片であることになるが、ともあれ (2) (3) にはこれという注目すべき記事が見えない。

かくして二冊の日記の少くとも主要な部分は、文化九年（雅澄数え年二十二才）の年頭から翌十年の秋にいたる雅澄の日記であることに疑いが無いと思われる。

さて日記の記事はおおむね極めて簡単なものであるが、当時における雅澄の研学の模様を窺うことが出来るのであつて、そこに主な興味がかつけられる。以下その点を主として、日記によつて知ら

れる事柄を順次に挙げてみよう。

桃李館に学んだこと。

文化九年一月十六日に「桃李館授読始」とあり、以後同年八月までの間に桃李館に出席したという記事が頻出する。(総てで百回。八月には回数が少くなる。) 桃李館が如何なるものか、残念ながら不明であるが、漢学塾であつたことは、雅澄がそこで左傳・論語・小学・詩経を学んでいることから明らかである。以前よりここに学んでいて、この年八月までそれがつづけられたものと思われる。漢学を中村隆藏に学んだという傳えと思い合わせると、桃李館とは中村の塾の名であつたかとも想像される。

教授館に通つたこと。

教授館は土佐藩の藩校である。文化九年六月七日の日記に「始教授館詣^{孟子講義}」とあり、その右に小さい文字で「万章上篇三章目ヨリ聞」とある。この頃から桃李館への出席が減少しはじめ、九月からは専ら教授館へ出席するようになっていく。出席回数は翌年三月二十九日までに九十六回、四月からは出席の記事がない。論語又は孟子の講義を聞いたとある日が四日ばかりあるが、あとは単に「教授館出」「教授館出勤」などとある。ところで文化九年六月二十一日、つまり教授館に出はじめて間もない頃の日記に、

教授館出、未ノ刻帰、今日万葉官本拜見始業
とあり、十年三月二十九日の日記に、

教授館出、万葉集書入卒業

とあつて(これについては下にも述べるが)、しかもこの三月二十九日を最後として教授館に出たという記事が見えなくなるのは意味ふかそうである。雅澄の教授館に出た目的は、表面はともあれ実際には、万葉研究の便宜を得るためであつたのではないか。恐らくそうであつたと思われる。なお「出勤」という文字が使つてあること、桃李館出席の記事には必ずその日読んだ本の名が書いてあるのに教授館の記事にはそれがほとんどないこと、この二つの点から、雅澄は教授館の何か下役として勤務しつつ、時には講義を聞き、かつ万葉拜見の仕事をつづけたのではないかと想像されるが、最初教授館に出た時にも既に万章上の講義をきいておるのであるから、出勤の文字にさほどこだわる必要はあるまい。教授館出席の記事に書名が書かれていないのも、雅澄の関心が既に万葉に集中していたからであるとすべきであろう。

友人同志で絶えず会談を行つたこと。

山本堅三郎・山本源吾・土居雅尙・村岡半藏・大町(稻城か)・竹村・岩井・楠瀬・小楓等の友人の間でしばしば会談を行つている。会談のテキストと、雅澄の出席回数とを示すと、靖献遺言(三回)、詩経(十回)、古文真宝(九回)、小学(二回)、史記本紀(四回)、左傳(十六回)、以上は漢籍であるが国書の方には厭蝕太平樂記(十五回)、直日靈(一回)、土佐日記(一回)、平家物語(三回)、土佐軍記(四回)、元親記(五回)、北条九代記(三回)、日本紀(四回)、日本紀(八回)。(ここに日本紀を重出させたのは会談のグループが別だからである。) これらの会談は同志の家々で交代に行われていることが多いが、雅澄の家が会場となつたことも二十回ほどあつた。ここに列記した書名を見わたしたところ、漢籍の方が国書におとらず学ばれており、国書にも研究の中心があるとは見えない。これは日記が他との交渉の記録を主とし、雅澄一人での読書や研究については記さなかつたためであると解せられる。

時々歌会に出席したこと。

歌会の記事は六回、そのうち文化九年二月二十七日の日記には歌が書きとめられている。すなわち「今夜於川原直蔭家歌会出席、探題ノ歌」として次の五首がある。

寄雨戀

シクシクニ雨フル夜ヲ妹ニコヒナツミテゾコシ雨ノ零夜ヲ

寄木

管白花ニホヘル君カ纏ケル春ノ柳ニナラマンモノヲ

寄草

大鳥ノ羽根ノ崎ナルナヒキ藻ノ靡キテ思フト妹シルラメヤ

寄露

掉牡鹿ノ通フ秋野ノ白露ノ繁キ念ヒニ吾ノ消ヌヘシ

寄獸

朝霧ノカラル岡辺ニ立牡鹿ノ立テモ居テモオモホエル君

もつばら万葉を模擬せんとしたあとが明らかであつて、彼の万葉研究がこの頃相当に進められていることも、これらの歌によつて想像されると思う。

万葉集への書入れを終えたこと。

これについては既に觸れておいた。文化九年六月二十一日に始められた万葉官本による書入れが翌十年三月二十九日に終了したということであるが、問題は万葉官本とは何であるかという点にある。後年のことであるが、雅澄自筆の「万葉集古義総考・四」(宮内庁書陵部蔵)の四十二丁の符箋に、「首巻目録ヲモ改ムル管、館本福岡本トモ」とある。古義総考の文を改めたので、それに應じて古義の首巻目録の文をも館本福岡本とも改むべきだといふのであるが、ここに館本といふのは教授館所蔵の万葉集古義であるとする他ない。一方やはり雅澄自筆の「万葉集人物傳」稿本⁽³⁾に、各人物の名の下に、例えば

古義三下三十丁 舊三ノ四十五丁

官四十五丁

の如くその人物のあらわれる古義註釈の部の丁数を示してある。單に古義とあるのは雅澄の手許にあつた本であり、「官」とあるのは「官本」の略で、教授館所蔵の古義であると思われる。かように雅澄は教授館の本を館本または官本と呼んだと認められるので、文化九年日記に万葉官本とあるのも教授館所蔵の万葉の意味であると思われる。(代匠記に見える官本万葉集は、古義の総論の諸本の項によつても、雅澄がこれを見ていないことが確かである。)

が、その万葉官本がどんな本であつたかは分からない。それは万葉集の一異本で、従つて雅澄の書入れは本文や訓の異同に関する書入れであつたと考えるのが順当のようでもある。しかし又それは万葉の註釈書であつたと考えることも出来る。何故といふに、

(1) もしこの時異本による書入れがなされたとするならば、その異本が古義にあらわれそうなものであるが、古義にはそれらしいものがない。

(2) この書入れを終えた年の秋に雅澄の書いた「万葉集記聞」⁽⁴⁾の本文異同に関する記事も、先行註釈書からの孫引以外には一つもない。

(3) 註釈書は書入本にもとづいて成立する例が多く、「記聞」にもそのもととなつた書入本(註釈に関する書入れをなしたもの)があるのが極めて自然である。三月に書入れを終えた万葉集こそそれであつたのではないか。

(4) 次章で述べるように、雅澄が万葉研究に没頭しはじめたのは文化七年をさかのぼらない。文化九年に異本研究に着手するのはいささか早きに過ぎるではなからうか。

かくして日記のいわゆる「万葉官本」とは教授館所蔵の万葉註釈書であつたとする考えに私は傾くのであるが、もしそうならばその註釈書は何であつたか。「記聞」に引用された先行註釈書を見ると、「考」「玉の小琴」「略解」の三つがあるに過ぎない。そして「考」や「略解」はすでに刊行もせられていたけれども、雅澄の手近な所にそれらがなかつたことは十分にあり得ることである(雅澄の蔵書目録⁽⁵⁾を見ると、雅澄が晩年になつても自分のものとしては殆んど何一つ万葉註釈書を所持してい

なかつたことがわかる。) 彼が教授館で見たのは多分これら三つの註釈書などであつたのではあるまいか。もとよりこれは一つの推測にとどまることであるが、とまれ日記によつて、雅澄の万葉研究が文化九、十年のころ着々とすすめられていたことが明らかになるわけである。

その他のこと。

日記によつて知られる主要な事項は以上でつきるが、他に雅澄の傳記を見る上に興味のある事柄を二三つけ加えておきたい。

その一つは雅澄の病弱であつたらしいことである。病氣のため桃李館や教授館を一日か二日ぐらいずつ休んだ記事が日記に散見し、その日数は通計十五日に及ぶ。後年雅澄は、「雅澄幼稚ノホドヨリ身ニチナクレノ病多クシテミツレニミツレシモノカラ…」(「報本論」)⁽⁶⁾ などとしばしば述懐しているのであるが、二十二・三才の頃も強健であつたとは言えないようである。

一つは雅澄の文珠信仰である。日記に文珠参拜とあるのが十三回、ほとんど毎月かかさずに、それも大抵は二十五日に参拜している。これは福井村なる雅澄の家から一里ばかりの五台山の文珠であつて、ある時は雞鳴にある時は夜に入つてから参拜しているのを見ると、青年雅澄の学問上達を願う一途な志のほどがしのばれる。

今一つは雅澄の旅行である。雅澄は終生郷国土佐を出でなかつたとよくいわれる。ところが日記によると文化十年三月、山を越えて讃岐の金毘羅に参詣し、丸亀の城下を見て帰つている。往復とも無論徒歩であるが、ある所では馬を借りて乗つた。生涯ただ一度の国外への旅であつたらしい。

〔註〕

(1) 深澄・ふか澄・深徹などと署名したものがある。この名は少くとも文化七年から十年まで用いられている。

(2) 「御家年代略記」(「山内氏時代史初稿」所引による。)

(3) この人物伝稿本の引目と巻一卷二とは書陵部にあり巻三は刈谷正勝氏の所蔵である。

(4) 「万葉集記聞」は佐々木信綱博士の所蔵で、現存するのは「万葉集第一記聞之二」一冊のみ。奥に文化十年癸酉秋日 深澄稿

とある。尾形裕康博士はその「鹿持雅澄」(P.342)及び「万葉学の大成」(P.40)に於て、この書が文化十年の成立であることに疑を存しておられるが、私見によればなんら疑うべき根拠がないのみならず、この書の書風は当時の雅澄の書風であつて、例えば飛鳥井雅四氏所蔵の「南留別志」(奥に、右文化十年癸酉冬日以鎰氏所蔵本書写終於陋室飛鳥井深澄とある。この日附の書きよは「記聞」のと同じい)などと全く同一である。文化十年三月に於ける雅澄の万葉集入卒業の事実からみても、「記聞」の成立時期ははなはだ自然であると思われる。

(5) 書陵部所蔵「鹿持雅澄藏書目録」、刈谷氏所蔵「藏書目録」。

(6) 雅澄が先祖の事蹟を述べたもので、子孫に対する教訓や自己の心境にも及んでいる。書陵部所蔵。

II. 青年時代の雅澄の歌稿

「古義先生著述書目」の「雅澄集」の解説文の中に

翁のわかきほどよりよまれたる歌多くありてかぞへがたし。中にも弱年の時は近世風の歌をもはらよまれしにや、近世風の歌は殊に多かりしを、翁の家にはをさをさとどまらず。

という一節がある。雅澄が万葉調の歌をよむより前に近世風(すなわち古今集以後の歌風)を多くよんだ事がこれによつて知られる。しかし上の文にも「翁の家にはをさをさとどまらず」と言つているのであるから、それらの歌はもはや今日に残つている事はなかるうと思つていたところ、このたび刈谷氏の傳える雅澄の藏書の中に、まさしく近世風を主とした雅澄弱年の歌を多数見出すことが出来た。それは紙綴で仮綴にした五冊の歌稿で、重ねると三寸ほどの厚みになるもので、雅澄に発表の意志がなかつたものであるから、もとより集としての名がない。それで今それらを、便宜上そ

の巻頭にある歌の題をとつて、「初春の巻」「雪の巻」「五月雨の巻」「湖霞の巻」「螢の巻」と名づけることとし、まづ各々についてその輪廓を略記することにする。

(甲)「初春の巻」

寅年(文化三年、雅澄数え年十六才)から辰年(文化五年)までの作歌が年時の順に収められている。歌の成るに従つて清書して行つたものであろうが、後から推敲を加えた歌が甚だ多い。この点は次に述べる(乙)(丙)も同様である。主体をなす部分の歌数は

文化三年	12 首
文化四年	244 首
文化五年	1079 首

であり、この部分の最後に見える日附は(文化五年)十二月一日である。以上とは別に巻末に

卯年四十三首	43 首
辰年乎 月のうたあまた詠たる	32 首
辰年乎 詠八月十五夜十五首	15 首

の三つを添えてある。

(乙)「雪の巻」

「初春の巻」につづく巻であつて、文化五年十二月から同六年五月までの歌を収める。やはり大体年時の順になつている。歌数は、

文化五年(十二月のみ)	43 首
文化六年(五月まで)	230 首

であるが、別に巻末に

(い) 詠百首歌 草庵集題借用	100 首
(ろ) 題詠八十四首(仮に名づく)	84 首
(は) 寛邦院公を悼み奉る辞	

の三つが加えられている。(い)は文化五年八月に始めて六年五月に成就したとある。(ろ)の歌は多く後述の「湖霞の巻」に文化六年三月から七月までの歌と共に収められ、又「螢の巻」でも文化六年のところに収められているので、文化六年の作品であることが分かる。(は)は「山齋集」にある「国つ君文化五年三月二十一日江戸にてうせ給ひぬるよし四月四日本つ国に聞えければ悼み奉る辞」の草稿であるが、寛邦院(山内豊興)の死は文化六年三月二十一日であるから、「山齋集」に文化五年とあるのは誤りである。とにかく(は)も文化六年の作である。

(丙)「五月雨の巻」

「雪の巻」につぐもの。歌数は

文化六年(五月から十二月まで)	218 首
文化七年(二月まで)	101 首

である。巻末に文化七年一月に行われた十番の歌合があり、左が雅澄の歌であるが、この10首は上の101首の中にも見えるものである。

(丁)「湖霞の巻」

この巻の歌は273首。そのうち270首は、「雪の巻」の文化六年三月から五月までの歌、同じ巻の末に附けられている題詠八十四首の歌、及び「五月雨の巻」の文化六年五月から七月までの歌の中からえらび出されている。残りの3首は何からとられたものか分からない。この巻は年時の順でなく、四季、戀、雜の順に排列せられている。

以上の四冊は、文化三年から七年二月に至るまでの雅澄の作歌のほぼ全部を傳えるものと察せられる。歌はほとんど題詠ばかりで、その歌風は「古義先生著述書目」にいわゆる近世風が大部分を

占めている。

(戊)「螢の巻」

文化三年から文政三年までの十五年間の歌をやはり年代順に集めたもの。その前半をなす文化七年二月までの作は、上記の甲乙丙丁の四冊からえらび出されたものである事が著しい。すなわち

- (1) 「初春の巻」(文化五年十二月まで)よりとられた歌
- (2) 「雪の巻」の前半(文化五年十二月より六年三月まで)からとられた歌
- (3) 「湖霞の巻」からとられた歌
- (4) 「雪の巻」附載の詠百首歌よりとられた歌
- (5) 「五月雨の巻」の後半(文化六年七月から七年二月まで)からとられた歌

の五つの部分が明らかに区別できるのである。以上の歌数は785首である。次に文化七年二月以後の歌は、これも「五月雨の巻」につづく同様の歌稿からえらび出されたものかと思われるが、今それらしい歌稿が見出されない。この部分の歌数390首である。この巻はおそらく文政三年頃、甲乙丙丁等のそれまでの歌稿から歌を選んで編んだものであるから、自然とこのうた作が多く、推敲の筆を加えたところも殆んどない。

さて以上五冊に含まれる歌の数を年度別に数えると大体次の如くなる。(文化八年以後の分は「螢の巻」に於ては年代順に並べられているらしいけれども、年度の境目が明らかでない事が多いので、一括して数えた。乙(い)の100は文化六年のうちに数えた。)

文化三年	12 首
文化四年	287 首
文化五年	1169 首
文化六年	635 首
文化七年	353 首
文化八—文政三年	138 首
合 計	2594 首

なお以上の他に文化六年に長歌1首旋頭歌3首、文化七年に今様2首、文化八年以後に旋頭歌4首今様3首があるが、これらは上の計算には入れていない。ここに数えた2594首のうち「山齋集」にある歌はわずかに170首であるから、新たに雅澄の作として付け加えられる歌は2424首となる。一口で言えばこれらは「山齋集」以前の習作であつて、作品としての價値は言うに足りないものであろうが、「山齋集」への道程を示すものとして興味が深く、その他傳記的考察の資料として役立つところも少くないのである。以下「山齋集」に収められていない歌をつとめて引用しながら、雅澄歌風の変遷その他について所見を述べることにしたい。

「螢の巻」には朱で合点の施された歌が171首あり、そのうち170首は、「山齋集」の巻頭から文政三年下元眞清に贈つた歌(山本修三氏編「山齋集」43頁)までの歌——ただし文化十三年の西灘旅行文化十四年の幡多旅行の歌を除く——と全く同一の歌であつて、その排列の順序まで一致する。これは「山齋集」のこの部分が「螢の巻」をもとにし、それから歌を選び出して編まれたことを示す。ところで「螢の巻」は前記の如く、「初春の巻」以下の歌稿から歌をえらんで編まれたものであるから、結局「山齋集」のはじめの部分(少くとも文化七年二月まで)の歌は、雅澄の当時の全作歌から二度にわたる撰歌の関門を経て最後に残されたものである事になるわけである。この二度にわたる撰歌の状態を数字の上を示すと次表の如くである。

年次	「初春」「雪」「五月雨」「湖霞」に於ける歌の数 (I)	「螢」にとられた歌の数 (II)	「山齋集」にとられた歌の数 (III)	(I) に対する (III) の百分比
文化三年	12	1	0	0
〃 四年	287	26	0	0
〃 五年	1169	244	7	0.6弱
〃 六年	635	453	21	3.3強
〃 七年 (二月まで)	101	61	10	9.9強
〃 七年 (二月以降)		252	48	
文化八年 文政三年		138	84	

この表の数字によつて、「山齋集」の傳える歌が当時の全作歌に対して如何に小部分であつたかが強く感じられるが、それに共に、「螢の巻」並びに「山齋集」に採択される歌の数とその全作歌数に対する比率とが、年と共に確実に増大してゆくのが認められるであろう。「螢の巻」の撰歌標準は幼稚未熟な歌を除き難のない整うた歌をとるという程度であつたと思われるので、この巻にとられる歌の増加は、漠然と雅澄の作歌に於ける習熟を示すに過ぎないと思われるが、これと違つて「山齋集」の撰歌の主要な標準は万葉調であるかどうかにあつたとすべきであるから、それに採択せられる歌の数と比率との増加は、雅澄作風に於ける万葉調の成長を意味すると見なければならぬ。そうして表の数字によれば、作歌の初二年の間には全く見られなかつた万葉調が、文化五年にいたつてはじめてわずかに芽生え、年ごとに成長してゆき、やがて文化八年頃からは雅澄歌風の基調をなすにいたると見られるのである。この間の推移を作品に即してながめてみよう。

雅澄の作歌が何時から始まるかは正確には分からないが、「初春の巻」の文化三年(雅澄十六才)の作12首——文化三年から翌年にかけて作られた百首歌の一部分である——は、作歌をはじめて間もない頃のものとして大過なかるう。その中から数首をぬくと(カッコ内は推敲された形。何時推敲されたか分からない。以下同じ。)

初春

初春の初日ののぼる長閑さに天雲拂ふ峯のまつ風

梅

梅の花それとぞ匂ふ霞む夜の梢いづれとみえ分ねども(梅の花香ひぞしるき霞む夜の梢はそれとみえ分ねども)

蛙

春雨の恵みをうけて妻戀に川津鳴なり池の玉もに

卯花

賤がやのかきねにさける卯花を雪かとのみぞ誤れける

など、なお未熟なもので、いかにも斯道の山口に立つた少年の作らしく思われる。

文化四年の作を少しく挙げてみよう。

蘭

ぬぎかけし主はしらねど藤ばかまきでみる野べに花ぞ匂へる

初雁

月影もまだ晴やらぬ夕霧に峯飛こゆる初雁の声(初句、月影もなほ)

夢逢戀

たまさかにかさね初ぬる小夜衣覺る名残の夢の面影

瀨中嵐

旅衣かたしく袖もさゆる夜にあらし吹そふ小夜の中山

浦千鳥

夜やふかく更てあかしのうら風に千鳥友呼声ぞ聞ゆる

これらによつて当時の歌を代表させてよいと思う。おおむね古今風の、時には新古今風のあとを追わんとするもので、縁語懸詞を好んで使っていること、体言止が非常に多いこと（全歌数の半数以上）などが目立つて感じられる。万葉の色彩は少しもない。かかる歌風が雅澄の出発点であつたわけである。

文化五年になると詠みぶりが達者になつてくるように思われる。「初春の巻」巻末の「月の歌あまた詠たる」を見ても、

河かぜに秋霧晴て山城の宇治のわたりに澄る月かけ
吹おろす生駒の風に霧はれて月かけ清し秋しのの里
雁鳴て月影きよくなりけり秋の夜いたくふけにけらしも
こもりくの初瀬の鐘の声ふけて峯のひはらに月澄わたる
霧拂ふ明石の浜の塩風に遠島かけて月すみわたる
漪やしがつに立て見渡せば比良の高ねを出る月かけ

など、相当の佳作もあるように思われ、前年に比べてかなり進境を示していると言えるが、同時にここには、第三首の「秋の夜いたくふけにけらしも」第四首の「こもりくの初瀬」のごとき万葉集の影響らしいものが見出されるのである。これは前年までの作には全然見られなかつたところである。この年の作は「山齋集」にもはじめてとられている（巻頭の7首がこの年の作である）が、それらは無論万葉模倣の作であり、他にも「初春の巻」には、

よそにきくかつらき山のほどとぎすいたくななきを我戀増る

参考・神奈備の伊波瀬の杜の喚兒鳥いたくな鳴きそわが戀まさる（万葉集八、1419）

蛙鳴く美津の小川にかけ見えて今や咲らん山吹の花

参考・河津鳴く甘南備河にかけ見えて今か咲くらむ山振の花（万葉集八、1435）

雁鳴て秋風寒くなるなべに春日の山は紅葉しにけり（三句以下、吹なべにさほの山へは色付にけりト改ム）

参考・長月の時雨の雨にぬれ通り春日の山は色付きにけり（万葉集十、2180）その他。

などのような明らかな万葉模倣作が見当る。文化五年に雅澄が万葉集を読み初めたことが想像せられるわけであるが、当時の歌風全体としてはなお到底万葉風であるとは言えない。すなわち、

元旦試筆

長閑しな春立けふや唐土も我日本を先あふぐらん

春風

まだき咲梅のほつえを吹そめて百木の花にほふ春風

春曙

心あらん人に見せばや足引の山櫻戸をあけぼのの空

無題

とへかしな春をとどめて藤浪の花咲匂ふ宿の梢を

白雨

鳴神の音もたゆみて夕立の晴行あとのかぜぞすすしき

擣衣

吹おろす生駒の嵐身にしてみて衣打也秋篠の里

夜戀

土佐の海や荒き磯邊による浪のよるは碎けて物をこそ思へ

山時雨

槇の葉も色づくばかり奥山の山べは間無時雨ふる也

(以上「初春の巻」)

かような歌がほとんどすべてを占めている。

春雨

けふ幾日ふるき軒端の春雨にむかししのぶの露ぞやどれる

寄川戀

音にのみ高瀬の川の川浪はわたらぬだにも袖ぬるるかな

無題

片糸の身をよりかくるかひあらば玉の緒ばかり逢見てしがな (三句、かひありてト改ム)

(以上「初春の巻」)

のごとき縁語懸詞をもてあそんだ作も相交らず少くない。万葉に興味を持ちはじめ、折々万葉語を使って作歌を試みたというのが、この頃の状態であつたと言つてよからう。

万葉風を模した作は文化六年になると急に多くなる。それは「山齋集」所收歌の數(上掲の表参照)から察せられる以上に多く、例えば次のような作に乏しくない。

花の歌十首よみける(「雪の巻」文化六年三月)

芳野山嶺にも尾にも咲匂ふ花の盛は見れどあかぬかも

初瀬山尾上の櫻咲ぬらし檜原かうれにかかる白雲

移ふも咲ぬもあれど櫻花なべては今を盛といふらん

朝さらぬ雲と見るまで高座の御笠の櫻咲出にけり

よる浪のかへさ忘れて孕瀉磯邊の山の花をみる哉

櫻花今盛なり打群ていざ袖ふらん春の山べに

吹おろす嵐の風の匂はずば花ともしらじ嶺の白雲(以下3首省く)

出来ばえはともかくも、まずは万葉風を自ざして詠まれたものと言えよう。第四首目のは「山齋集」にも收められている。

この年五月にははじめて万葉仮名で書かれた歌があらわれ、同じ月につづいて譬喩歌と題する作四首がある。

夜五月雨(「雪の巻」文化六年五月)

搔疊晴間文不見梅雨二月之夜頃目安太二過南

譬喩歌(同上)

予而從吾標結志春日野之石竹乃花誰手折武

七月にははじめて長歌の作があり、ついで八月には旋頭歌が作られた。この旋頭歌は友人大町稻城におくつたもので、

吹風もややはだ寒き秋の終夜 若草の妻し卷らん君し乏しも(「五月雨の巻」。末句、君をしそ思ふト改ム)

稻城の返しも旋頭歌であつた。幼稚なものながら雅澄十九才の作としてほほえましく、とにかく万葉独自の歌体ともいべき旋頭歌がはじめて試みられたわけである。かように雅澄の万葉追隨は、用字法や歌体にまで及んで行くのであつて、この頃からの作歌のおよそ半数は万葉集を念頭において詠まれているように思われる。

雲（「雪の巻」文化六年三月）

磯遠く撈出て見れば石見の海高角山に雲棚引ぬ

百合（同上，五月）

夏草の野島か崎に舟よせてさゆりの花のさかりをそ見る

鵜舟籜（「五月雨の巻」文化六年五月）

さ月闇夏箕の河の川淀に鵜飼の小船かかりさす見ゆ

春川（同上）

春去は若鮎さはしる松浦河流るる水の音も長閑し

などのような万葉の語句をとつたものも多く見当る。がそれと共に一方に、

増戀（「五月雨の巻」文化六年五月）

哀わかよる瀬もしらて泪川袖斗社泥まさりけれ

思川渡らぬ先はかく斗吾衣手もしほらざりしを

桂浜（同上，七月）

所から月の光し清ければかつらの浜と名にや立らん

などの如き後世風の歌が、万葉を学んだものにおとらず多く詠まれているのである。

文化七年の歌も六年のと大きな相違はない。一々例を挙げるまでもないが、新たに見出された歌の紹介かたがた、この年の作若干を引いておく。「山齋集」に「文化年年毎日詠一首歌之中八首」があるが、「螢の巻」には「年年毎日一首歌之中」として115首載せられている。次に引くのはそのはじめの10首で、第八首は「山齋集」にとられているものである。

毎家有春

けふとてや宮もわらやも隔なく長閑なるよの春に逢らむ

忍尋縁戀

あやなくに茂き人目を忍ふ草露のよすかをたれにとははや

霞隔行舟

ほのほのとかすみの浦の朝なきに奥こく舟のゆくへしらすも

思不言戀

しるらめやえしもいはれの池水の深くも君をわか思ふとは

鶯遷喬木

いつしかも谷の戸出て我そののたか木にきなく鶯の声

野外残雪

春立と猶さえかへる程見えて残るも深きのへのしら雪

春風解氷

氷りぬし網代のなみも打とけて八十字治川に春風そ吹

惜無名戀

うつせかひみなきこともち白浪の音に立なん我名しをしも（三句おきつ浪ト改ム）

梅有佳色

咲匂ふ御園の梅の色にしもさかゆく御代の春そしらるる

閑居待友

塵の世をのかれて住る隠家にとふへき友の何またるらん

この年の作は「山齋集」に58首入っているが、そういう純万葉風と並んで、万葉風でない歌がなおはなはだ多かつたことが知られるであろう。雅澄の歌は、「山齋集」から感じられるような万葉一点張にはまだなつていなかつたわけである。

文化八年以後については、何よりも作歌数の減少が目立っている。前に掲げた表によつても分かる通り、雅澄の作歌数は文化五年を頂上とし、六年、七年にもなお相当に多作であるが、八年以降はそれが急激に減つているのである。これは一つには現存資料の偏在（文化七年二月までの歌はほとんど総て残り、それ以後のは「螢の巻」に収められたもののみ残つたということ）にもとづくが、それだけでは到底あり得ない。各年度の全作歌から佳作をえらんだ筈の「螢の巻」に於ても、文化七年の作319首に対して文化八年から文政三年にいたる十年間の作は合計145首にすぎない。特に文化八年から同十一年までの歌数はわずかに合計31首である。（「螢の巻」のこのあたりは、どの範囲が何年の作であるかあまり明白でないで、31という数字は確かでないが、大勢には関しない。なお文化十年ごろからは、「螢の巻」にはないけれども、「山齋集」によると折々長歌がよまれるようになっていゝ。しかしこれも大勢に影響することはない。）「螢の巻」への採択率が年々向上していることを勘定に入れるならば、文化七年と八年との作歌数の相違は、上の数字にあらわれた以上に大きかつたとも言える。なお、前章で、文化九年から十年にわたる一年半ばかりの雅澄日記に、歌会の記事が六回見出されることを述べておいたのであるが、この回数をも文化五・六・七年にわたる二年二ヶ月の間の雅澄の歌会出席回数九十八回（これについては後に述べる）に比べてみてもよい。とにかく文化七年から八年への変化はただごとでないという感じを持たざるを得ないのである。

思うに恐らく文化七年後半のころ、雅澄二十才にして生涯の上の一つの転回が行われたのではないかと思われる。そしてそれは作歌から学問への転回であつたと、きわめて自然に考えられる所であろう。⁽²⁾文化五年ごろからだんだんに親しんできた万葉集は、今やここで雅澄の全精力を傾注して惜しみなき研究の対象となる。傳えられる如く若い雅澄が古事記傳におとらぬ万葉註釈の大著を成しとげたいという志を奮い立たせたとするならば、それはこの時を措いて他になかる。時は一刻も惜しまなければならぬ、作歌は自然に放棄せられた形にならざるを得ない、というようなのが当時の雅澄の状態ではなかつたかと思われる。それであつてこそ、やがて文化九年には教授館に通うてまで万葉関係の本を見ようとしたこと、そして間もなく「万葉集記聞」さえ成るにいたつたことが、自然な成行として理解されるのである。

万葉研究への没頭は作歌数の激減となつてあらわれると共に、作られた少数の歌はいよいよ万葉主義によつて一貫されるようになってゆく。「螢の巻」の文化八年以後数年間作のかと思われる31首は、その半数15首が「山齋集」にとられているし、えらび漏らされた歌にしても、例えば

かきつばた

水たまるわぎへの池のかきつばた花の盛を早も問なん

わらびにそへて女のもとへ

春霞棚引岡の初わらびもえて思はぬ時の間もなし

の如く、万葉調又はそれに近いものが多いのである。

文化十二年からは作歌数が再び幾分増加するが、もとよりその数は文化七年までとは比較にならない程度である。作歌がもはや雅澄にとつて第一義でなくなつていたとすれば、これは当然のことであろう。幾分増加して來たのは、研究の方が一段落したからか、それとも研究の進捗にともない暇々に作歌を楽しむだけの心の余裕が生じたからでもあろうか。そうして、この頃になるともはや「螢の巻」に収められた歌から万葉的な歌を見出すことはむづかしいし、又それらは殆んどすべてが「山齋集」にも入れられるようになっていゝのを見る。ただ「螢の巻」文政三年の作は、どうしたものか「山齋集」に一首もとられていないが、作そのものは決して後世風ではないのであつて、例えば

春 月

いでてみよいざわわぎもこ向岡の毛桃の花に月夜ゆつりぬ

伊予国医者永野大乾四十賀

雲爾飛葉食有可吾兄子之月爾日爾異彌姿若爾姿若

月下菊 九月十三夜大隅様御兼題

今夜之清月夜乎菊花手折頭刺而遊久吉毛

所誂門人貫成作旋頭歌 詠月雪花

吾屋前之庭毛保杼呂爾雪降爾氣理 朝目與久吾見庭爾雪降爾來

我門之淺茅於爾月照爾來 白露乎玉等成管月照爾計里

向岡之尾上之櫻花開爾來 妹登我折可挿頭花咲爾來

のようなまぎれもない万葉調ばかりである。ここらになると、古代語を自在にあやつるというばかりでなく、万葉の風格をかなり見事に再現したものと言つてよからう。この旋頭歌にしても、これを前に掲げた太町稻城に送つた作に比してみれば、雅澄の伎倆が目ざましい上達を示していることが分かる。かくして、文化八年ごろから専ら万葉風を旨とするようになった雅澄の作歌は、およそ文化十二年二十五才の頃に至つてその万葉調を確立し、その後いささかも動搖することがなかつたと考えられる。文化十二年の頃に至つて万葉風をマスターし終つたことの蔭に、作歌を放棄したかに見えた四年間の万葉研究への没頭があつたことは言うまでもないところであろう。

これまでに述べてきた主要な点を列記しておこう。

文化三年(16才) 作歌を始む。これ以後近世風を詠す。

文化五年(18才) 万葉への関心萌芽し、万葉模倣の作少数を詠す。

文化七年(20才) 万葉模倣の作多し。この年後半の頃より万葉研究を志し作歌をほとんど廢す。

文化八年——十一年(21才—24才) 万葉研究に没頭す。その作歌は少数ながら益々万葉風に向う。

文化十二年(25才) 万葉調確立し不動のものとなる。

「雪の巻」を見ると文化五年のところに、一群の歌のあとに、

右十二月六日添削

とある。かかる記事はこれが初めであるが、その後「雪の巻」にも「五月雨の巻」にもたびたび現われる。それらの中には、

右正月廿日余添削、卅日取來

のような書き方のもあつて、雅澄が何人かに歌の添削を受けたことが知られるが、この歌の師は宮地仲枝であつたことが次の事実によつて確かめられる。すなわち「雪の巻」附載の百首歌の末に、

百くさのうき言の葉を何然も難波の浦のよしとみるべき (百くさの言葉の種は取つれど何か難波のよしは有べきト改ム)

と一首を添えてあり、その上欄に、

右百首七月九日持出、同廿七日取來

とある。しかるに「五月雨の巻」文化六年のところに

ふみ月の頃百首の歌を宮地仲枝ぬしに見せける其奥に書つけ侍る

百草の言葉の種はとりつれど何か難波のよしはあるべき

かへし

仲枝

もも草の言葉の種を取つれど難波のあしはまじらざりけり

とあつて、「雪の巻」上欄の記事と符合するのである。これによつて文化五年十二月以後たびたびあらわれる添削の記事すべてが、仲枝の添削を受けたことをさしていると見て差支えあるまい。もし然らば雅澄の仲枝に入門した時期は(これまで漠然と推測する他なかつたが)おそくとも文化五年(雅澄18才)の暮であつたことになるわけである。

雅澄は歌の批評を友人に求めたこともあつた。「五月雨の巻」に、

八月の頃井上好春が許へ歌書集て見せ侍る其奥にかい付て遣しける

数々に書集めても言のはの匂ひありとは誰かみるべき

とあるのはその一例である。歌の上の交友として「初春の巻」以下に最もしばしば現われるのは土居雅尚⁽³⁾であり、ついで平粥直・大町稻城その他がある。これらの仲間の間では絶えず歌会が行われた。探題・兼題・当座の歌がそこで詠まれ、時には歌会が行われた。「初春の巻」「雪の巻」「五月雨の巻」に現われた歌会(文化五年正月から七年二月まで)の回数を数えると、文化五年32回、六年54回、七年(二月まで)12回であつて、そのうち雅澄の家(草庵の会、愚亭の会などとする)で催されたものが22回である。もつとも「夜雅尚來りて当座」などとするのを上の数に加えたので、歌会という程のものでない場合も多かつた筈であるが、とにかくその頻繁さは驚くばかりである。かような作歌への熱中あつてこそあの多数の詠作がなされたわけであろう。がそこには向学の念がどれだけ動いていたか。

後年のことであるが雅澄は「奉伺口上覺」において、区々斗筭の身が歌合など翫ぶのはよろしくない⁽⁴⁾と常々來学の門弟たちに諭すけれども、門弟たちは「理に責られてまのあたりにはもどききしろふ色も見え不申帰服したる様に見え候へ共、其席を退き脇々へ行而は、早其手の下に、歌合点取等之事とやかく申談候様」であると慨歎している。これは幕末土佐の下級武士などの間に歌合点取などが一種の流行として廣く行われていたことを想像させると思う。文化三年から六・七年頃までの雅澄も又、これに近い流行にまきこまれて作歌に耽つたと見られるではなからうか。少なくとも文化七年ごろまでの彼は、歌すきの青年たちの仲間の一人であつたに過ぎないように私には思われる。ただそうした流行に流されてしまつたのではなく、やがて万葉研究という大きな目標をつかみ、これをつかむや断乎としてこれに向つて進み、致々として倦まなかつたところに、雅澄の雅澄たる所以があつたのだと思われる。

〔註〕

- (1) 飛鳥井雅四氏藏。「万葉集古義」以下の雅澄の著述を列举して解説を加えたもの。門人寺田保の編ということになっているが、実は雅澄自身の書いたものである。
- (2) 綿谷雪氏ははやく「鹿持雅澄私見」(「国語と国文学」大正十五年十一月・十二月号)に於て、専ら「山斎集」の考察にもつて、文化八年から同十二年頃までの雅澄の作歌の少いことを指摘し、かつその原因は万葉研究への着手にあると推定せられた。その炯眼に服するものである。なお中野虎三著「国学三遷史」の雅澄の項に「雅澄幼より学を好まず、父母甚これを憂ひたりしが、年十七八才に及びて、心に感ずる事あり、大に憤を發し力を文学に尽し…」とあるのは参考に価する伝えであろう。
- (3) 雅尚は青年時代の雅澄のもつとも親しい交友であつたらしい。「雪の巻」文化六年正月以後、歌稿にもつともしばしば現われるし、文化九年の日記で見ても、「小学」「土左日記」の会談を共にしており、又一緒に文珠参拜をもしている。なお文化七年には雅尚所持の「土左日記」を雅澄が写している。この「土左日記」は飛鳥井雅四氏の所蔵で、奥に
文化七年年土居雅尚か本をもて七月十六日より筆を染はしめて同十八日にうつしをへぬ 飛鳥井深澄とあり、妙寿院本系統の本で雅澄の書入れが若干ある。
- (4) 飛鳥井雅四氏所蔵。弘化二年十月に教授館御目附中金子嘉治馬に提出せられた。古義軒に於ける国学教育の方針とその方針の徹底しがたきことを、八ヶ条に分かつて述べ、最後に、來学の少年共の励みになるように彼等の名前を毎年学館(教授館)に報告するよう命ぜられた旨を記してある。

後記。本稿の主な材料は刈谷正勝氏の御好意によつて調査することを得た。同氏並びにその他の引用図書を見ることを許された方々に深謝の意を表する。

